

MIDSUMMER EVENING CONCERTS

TWO PLANOS – THREE PLANISTS

2夜連続演奏会・真夏の夜の2台ピアノ

I. 15 AUGUST 2003 (FRI) 19H30

II. 16 AUGUST 2003 (SAT) 19H30

SHINJUKU TSUNOHAZU KUMIN HALL

TOKYO, JAPAN

第一夜 フランス音楽をめぐる旅

——マダム・ピュイグ＝ロジェとともに——

アンリエット・ピュイグ＝ロジェ女史(MADAME HENRIETTE PUIG-ROGET, 1910-92)は、フランスですぐれたピアニスト、オルガニスト、作曲家、教育者として活躍した。パリ音楽院教授退官後の1979年に東京芸大の客員教授として来日し、1991年まで滞在、日本での教育・演奏活動に尽力した。没後10年を機に女史の日本での業績がまとめられ、《ある「完全な音楽家」の肖像——マダム・ピュイグ＝ロジェが日本に遺したもの》とのタイトルで本年2月に音楽之友社より刊行された。同書の巻末に、日本滞在10年間の演奏会記録が掲載されている。各回の充実した内容、演奏曲目の質・量の豊富さには瞠目すべきものがあり、その一連の履歴全体が、そのまま、すべての演奏家の目指すべき指針となっているのである。第一夜は、マダム・ピュイグ＝ロジェゆかりの曲を手がかりとして、皆さんとともに、近代、現代のフランス音楽の表玄関から奥座敷へと訪ね入っていく夕べとしたい。

第一部

1. カミーユ・サン＝サーンス：白鳥

CAMILLE SAINT-SAENS [1835-1921]: LE CYGNE

《白鳥》といえば、古今のフランス音楽の中で、最も広く親しまれているもので、第一夜の幕開きにふさわしい曲と思う。マダム・ピュイグ＝ロジェは、サン＝サーンスについて「フランス音楽の一時代を公的に代表する存在」、「先生の中の先生」と評し、直接会ったことはないが、少女時代に、いかにも老獪で狷介そうな最晩年のサン＝サーンスを遠くから見たことがある、と語っている。

2. エマニュエル・シャブリエ：3つのロマンティックなワルツ

EMMANUEL CHABRIER [1841-94]: TROIS VALSES ROMANTIQUES

- I. TRES VITE ET IMPETUEUSEMENT
- II. MOUVEMENT MODERE DE VALSE
- III. ANIME

ピアノデュオの名曲の数々が百花繚乱と咲き誇った近代のフランス音楽の中でも、シャブリエのこの機智に富んだ華麗なワルツは名作との評価が定着している。マダム・ピュイグ＝ロジェは、高野耀子さん、佐々木素さんら、気心の知れた共演者とともに、日本各地で、2台ピアノ、ピアノ連弾の演奏を行い、有名な曲から知られざる名曲まで幅広くとりあげたものだが、特にシャブリエのこのワルツはお気に入り、アーンのワルツと並び、最も演奏頻度の高い曲であった。

第二部

3. シャルル・ケクラン：2台のピアノのための組曲 作品6

CHARLES KOECHLIN [1867-1950]: SUITE POUR DEUX PIANOS, OP.6

- I. ANDANTINO
- II. ANDANTINO CON MOTO
- III. ANDANTINO CON MOTO QUASI ALLEGRO
- IV. ANDANTINO QUASI ALLEGRETTO

マダム・ピュイグ＝ロジェは晩年のケクランと交流があり、ケクランの音楽の持つ一種独特のわび、さびは、日本人にこそ深く響きあうものがあるはずだ、と、鋭い指摘をしている。フォーレの高弟であったケクランは、和声学・対位法の泰斗として高名であったが、作曲家としても、自然の風物に靈感を得、独特の静謐な雰囲気をつたえた佳品を多く残している。この2台ピアノのための組曲はケクランの最初期の作品であり、つゆ草を思わせるような楚々とした雰囲気が好らしく、百年以上も昔の音楽だとはわかには信じがたいほどに、そのまま現代に通用する「癒し」の音楽たりえているのである。

4. ジャン＝ミシェル・ダマーズ：誕生日のあいさつ

JEAN-MICHEL DAMASE [1928]: COMPLIMENT D'ANNIVERSAIRE

ダマーズは、現代フランス楽壇保守派の重鎮である。ダマーズの作曲の師、アンリ・ビュセルは、マダム・ピュイグ＝ロジェの師匠でもあった。マダム・ピュイグ＝ロジェは、若き日、ローマ賞作曲コンクールに挑戦して二等賞を獲得しているが、ダマーズも、19歳の若さで一等賞を受賞するほどのたくいまれな才能の持ち主である。ダマーズはピアニストとしてもすぐれ、とりわけフォーレ演奏では特筆すべき存在である。1964年に書かれた《誕生日のあいさつ》は、ポリニャーク公妃令嬢のために書かれたもので、いわば《ハッピー・バースデー変奏曲》の趣きである。誰もがお誕生会で歌うおなじみの旋律と、ダマーズ自身の書いた副旋律とを素材にして、多彩な変奏が次々と姿をあらわす。

5. ロジェ・ブートリ：おしゃれ泥棒（2台ピアノ6手）

ROGER BOUTRY [1932]: LE VOLEUR D'ETINCELLES (POUR SIX MAINS)

- I. ANDANTINO (財宝と泥棒)
- II. VIF (逃亡成功?)

ケクラン、ダマーズでおくつろぎいただいたところで、短くてパンチのきいたフレンチ・コメディをお届けしよう。盗みの手管は超一流だが、どこか人間的で憎めないところのある古典的な泥棒をイメージしていただくとい。金銀財宝を目の前にして思わず陶然としている泥棒。うっかり見つかって、すねこそと、財宝を抱えて脱兎のごとく逃げ出す泥棒。この愛すべき泥棒が、追っ手に捕まらずに無事に逃げおおすことができるかどうかは、ひとえに、演奏者の6本の腕にかかっているのである。

第三部

6. レイナルド・アーン：2台のピアノのためのワルツ集 《ほどけたリボン》
REYNALDO HAHN [1875-1947]: LE RUBAN DENOUE – VALSES A 2 PIANOS

I.	DECRETS INDOLENTS DU HASARD	偶然の運命のたわむれ
II.	SOUVENIR... AVENIR...	過去... 未来...
III.	LA CAGE OUVERTE	開かれた鳥かご
IV.	SOIR D'ORAGE	嵐の夜
V.	LES BAISERS – IL SORRISO	口づけ —— 微笑み
VI.	LE SEUL AMOUR	ただ一つの愛

マダム・ピュイグ＝ロジェは晩年のアーンと懇意で、マダムがこの粋人の作品を日本で紹介することに非常に熱心であったことは、私たち日本人にとって本当に幸運なことであったといわねばならない。その意義深さに思いを致しつつ、第一夜はこの作品でしめくりとしたい。

レイナルド・アーンは、南米ベネズエラのカラカスで、ユダヤ系の富裕な商人の家庭に生まれた。3歳の時に一家でパリに移り、6歳でナポレオン三世の従妹マチルド公爵夫人のサロンにデビュー、十代半ばにして、当時の爛熟期の上流サロンの寵児となった。アーンは、その端麗な容姿、魅惑的な美声、巧みな話術、きわだった楽才によって、フランス社交界随一の花形ともてはやされ、女優、モデルやパトロンと数々の浮名を流すなど、つねに華やかな醜聞の渦中にあった。作家マルセル・ブルーストの無二の親友であったこともよく知られている。華やかな世界に身を置きながらも、アーンは自己の芸術に真摯であり、その音楽は、深い内容をそなえた第一級のものであったことは言うおかなくてはならない。アーンの音楽には、通俗的サロン音楽に特有の、安手の砂糖菓子のような甘さはない。

連作ワルツ集《ほどけたリボン》は、第一次大戦従軍中、衰微したサロンへの深い懐旧の情につき動かされて書かれたものである。2台のピアノが、時に語り交わし、時に共に歌いながら、詩的で余情豊かな調べを織り上げていく。繊細、玄妙をきわめたその筆致は、人生の明暗を知り尽くした人ならではのものであろう。アーンのこの作品こそは、古今東西のあらゆる2台ピアノ作品の中でもひととき異彩を放つ、魅力的な作品といえるだろう。マダム・ピュイグ＝ロジェゆかりの曲のなかでもとりわけ重要なこの作品は、今後とも折にふれとりあげてまいりたい。

* 第一夜の演奏 *

第一部： 小山・益子、 第二部： 益子・西原 小山・益子・西原(6手)、 第三部： 小山・西原

第二夜 セミ・クラシック

真夏の夜のコンサート・第二夜は、肩のこらないセミ・クラシック、ライト・クラシックをお届けしたい。いかめしいクラシックではなく、かといって、純然たるジャズ、ポップスとも違う、というこのジャンルには、知られるべき多くの名曲が未だ手つかずの状態で眠っているのである。軽快なリズム、親しみやすいハーモニー、ロザミたくなるメロディ・・・ともかくも、いろいろな性格の音楽をとりそろえてみた。この中から、あなたのお気に入りの一曲が見つければ幸いである。

第一部

1. アルバート・ケテルビー： ペルシヤの市場にて (2台ピアノ)
ALBERT KETELBEY [1875-1959]: IN A PERSIAN MARKET

セミ・クラシックの元祖、といえばこの曲をおいてほかにない。昔神童、はたち過ぎればただの人、の典型で、鳴かず飛ばずのしがないアレンジャーだったケテルビーは、一躍この曲で成功し、音楽史にその名をとどめることとなった。器用貧乏な人らしく、有名な管弦楽版のほかにも、ピアノ独奏版、ピアノ連弾版、2台ピアノ版を自らの手で編曲しているのである。

2. アーサー・ベンジャミン： ジャマイカの2つのストリート・ソング (2台ピアノ)
ARTHUR BENJAMIN [1893-1960]: TWO JAMAICAN STREET SONGS

- I. MATTIE RAG
- II. COOKIE

ベンジャミンは、カリブ海諸島の音楽に魅せられ、名作《ジャマイカン・ルンバ》をはじめとして、ラテン・テイストをとり入れた、親しみやすい作品を多く残している。このストリート・ソングは、素朴なメロディが、あたたかなハーモニーに乗って優しく歌われるものである。

3. ジェームス・ウォーカー： ルンバ (2台ピアノ)
JAMES WALKER [1929-]: RUMBA

3-3-2できざまれるルンバのリズムは、どうしてこれほど親しみやすいのだろうか。このリズムには、何か人を惹きつけてやまない魔法が隠されているように思われてならないほどである。ウォーカーのルンバも、このリズムの魅力をそのまま生かし、親しみやすいメロディを乗せたものである。

8. サー・リチャード・ロドニー・ベネット: 丘を越えて (ピアノ連弾)
SIR RICHARD RODNEY BENNETT: OVER THE HILLS AND FAR AWAY

9. サー・リチャード・ロドニー・ベネット: 夜はやさしく (ピアノ独奏)
SIR RICHARD RODNEY BENNETT: TENDER IS THE NIGHT

10. サー・リチャード・ロドニー・ベネット: 組曲 (2台ピアノ)
SIR RICHARD RODNEY BENNETT [1936-]: FOUR PIECE SUITE
 - I. SAMBA TRISTE
 - II. COUNTRY BLUES
 - III. RAGTIME WALTZ (HOMMAGE TO SCOTT JOPLIN)
 - IV. FINALE (TEMPO DI HARD ROCK)

コンサートの最後は、英国・米国で「サー・リチャード」と呼ばれ親しまれているベネットの作品をお届けしよう。ベネットは、クラシックから映画音楽まで幅広く手がける作曲家であるが、ジャズの世界でも腕っこきのピアニスト、ボーカリストとして活躍している。民謡にしゃれたアレンジを施した連弾、BBCのテレビドラマサントラの「さわり」をお聴きいただくピアノソロ、そしてジャズ・ポップスのイディオムをふんだんにとり入れた2台ピアノ、それぞれにお楽しみいただきたい。

* 第二夜の演奏 * ピアノ独奏: 益子, 4手連弾: 小山・西原, 2台ピアノ: 益子・西原

* 演奏者紹介 * PIANISTS

益子 徹 TETSU MASHIKO 1976年栃木県生まれ。宇都宮大学卒業。
北英国王立音楽院 (RNCM) ピアノ伴奏科修士課程に在籍中。

小山 佳枝 KAE OYAMA 1974年福岡県生まれ。慶應義塾大学卒業。

西原 昌樹 MASAKI NISHIHARA 1972年岡山県生まれ。上智大学卒業。

* 次回は、2003年 9月 7日(日) 19:00 新宿文化センター小ホールにて「アレクサンドル・タンスマンの世界 II」を開催の予定です。

* お手紙は〒169-8799 新宿北郵便局留オフィスPCC宛, e-mail は pccpiano@hotmail.com に。

* コンサート記録 * OUR CONCERT HISTORY

- 2001年2月24日 板橋区民会館小ホール 2台のピアノの夕べ〈サン＝サーンス(I)とダマーズ〉
<SAINT-SAENS ET J.-M. DAMASE> ダマーズ: ソナチネ, バストラール, トッカータと終曲
サン＝サーンス: アルジェリア組曲, 前奏曲とサラバンド, ヴィクトル・ユゴーへの賛歌
- 2001年6月2日 トモノホール(市ヶ谷) 2台のピアノの夕べ〈セミクラシック(I)とサン＝サーンス(II)〉
<DEMI-CLASSIQUE ET ST.-SAENS> コール・ポーター・メドレー, ナザレー: コンフィデンシアス,
R. R. ベネット: 組曲, サン＝サーンス: アラブ綺想曲, ロマンズ, ヘラクレスの青年時代
- 2001年10月13日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノの夕べ〈アングロサクソンとサン＝サーンス(III)〉
<ANGLETERRE ET ST.-SAENS> A. ローリー: 組曲, R. V. ウリアムズ: グリーンスリーブス幻想曲,
H. ブレイク: 舞曲集, サン＝サーンス: 春はきたりて, 交響曲第1番(2台ピアノ版)
- 2001年11月24日 榎坂スタジオ クレメンティ生誕250年に向けて〈PRE-250TH ANNIVERSARY OF
MUZIO CLEMENTI〉 連弾ソナタ OP.3-3, OP.14-3, 独奏ソナタ OP.24-2, 打楽器伴奏付ワルツ OP.39 より
- 2002年1月6日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノの午後〈セミクラシック(II)とサン＝サーンス(IV)〉
<DEMI-CLASSIQUE ET ST.-SAENS> A. オハーン: 主題とジャズ変奏曲, ギロック: パリ2題,
アストル・ピアソラ・メドレー, サン＝サーンス: 前奏曲とフーガ OP.99-1, バッハ＝グノー: アヴェマリア,
グノー: 協奏的組曲(サン＝サーンス編曲2台ピアノ版——本邦初演)
- 2002年3月17日 新宿文化センター小ホール
原 智恵子さんを偲んで——昭和25年の演奏会の曲目による2台のピアノの夕べ
<IN THE MEMORY OF MADAME CHIEKO HARA DE CASSADO> モーツァルト: 2台のピアノの
ためのソナタK. 448, サン＝サーンス: ベートーヴェンの主題による変奏曲, シャプリエ: 3つのロマンティックなワルツ
- 2002年5月11日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノの夕べ〈パリとウィーン(I)〉<PARIS AND VIENNA>
R. ブートリ: 子守歌とロンド, E. パラディル: 小さな鏡, サン＝サーンス: 糸杉と月桂樹,
シューベルト: 6つのレントラー, メヌエット ニ長調, モーツァルト: ハフナー・セレナードより
- 2002年7月14日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノの夕べ〈パリとウィーン(II)〉<PARIS AND VIENNA>
モーツァルト: ラルゲットとアレグロ, シューベルト: ピアノソナタ イ長調 D.664(独奏: 益子徹)
サン＝サーンス: 序奏とロンド・カプリチオーソ(ドビュッシー編曲版), メヌエット変ホ長調
グノー: 協奏的組曲(サン＝サーンス編曲2台ピアノ版——再演)
- 2002年9月7日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノの夕べ〈リチャード・ロジャース生誕100年〉
<THE CENTENNIAL OF RICHARD RODGERS> ロジャース: ドレミの歌, トリプル: The Gartner Mother's
Lullaby, The Green Bough, ベンジャミン: ジャマイカン・ルンバ, ジャマイカリブソ, R. R. ベネット: 組曲,
ロジャース&ハート, A. オハーン: 主題とジャズ変奏曲, H. ブレイク: 舞曲集
- 2002年11月10日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノの夕べ〈パリとウィーン(III)〉<PARIS AND VIENNA>
ロシュロール: ワルツ, ダンドロ: 幻想的ワルツ, トメ: 飾らぬ告白, ギロック: シャンパン・トッカータ(2台
8手), ダマーズ: ソナチネ, ブラームス: 5つのワルツ, モーツァルト: ソナタK. 448
- 2003年1月18日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノの夕べ〈イギリスとフランス〉<ENGLAND & FRANCE>
ローリー: 5つの抒情小品と練習曲, ブリテン: カンツォネッタ, トリプル: 3つの小品, グレインジャー:
収穫の賛歌(2台8手), ピエルネ: おもちゃの兵隊の行進(2台8手), ダマーズ: トッカータ, パッサカイユ
と終曲, ボエルマン: ノートルダムの祈り, サン＝サーンス: ヴィクトル・ユゴーへの賛歌
- 2003年3月21日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノの夕べ〈地中海から南米へ〉
<AN IMAGINATIVE TRIP TO SUL-AMERICA> N. ローレム: シシリエンヌ, サン＝サーンス: アルジェ
リア組曲, ロペス＝ブチャルド: 夜曲, ロンガス: ホタ・アラゴネーゼ, カルロス・グアスタビーノ: バイレシート,
鳩のあやまち, ピント: 子どもの情景, ミニョーネ: ヴァルサ＝ショーロ第8, 10番, サンバ＝リトミコ
- 2003年4月19日 新宿文化センター小ホール 〈アレクサンドル・タンスマンの世界〉
<DEDICATION TO ALEXANDRE TANSMAN> 子どもの魂(6手用, ジャン・クラ作曲), 以下全てタン
スマン作品: ピアノを弾く若者第1巻(連弾), 同第2巻(連弾), ブルースの形式による2つの前奏曲(独奏),
3つの小品(友人のアルバムより・独奏), カーニバル組曲(2台), シュトラウスのワルツによる幻想曲(2台)